

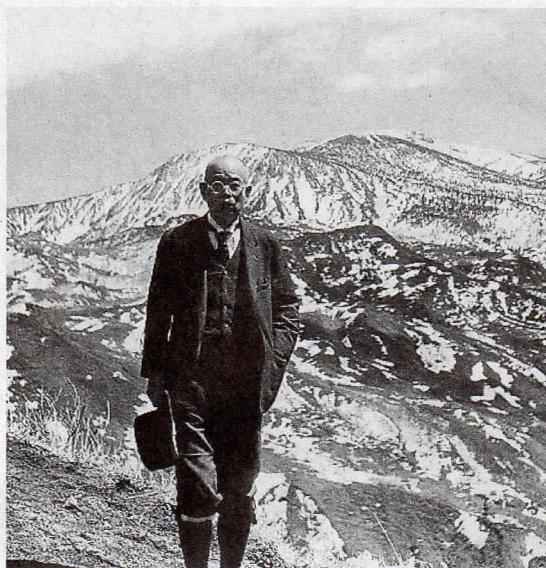
いま、茂吉と向き合う

今年近代短歌の巨星・斎藤茂吉の生誕130年。時代を超えて読み継がれ、現代短歌に影響を与えてきた仕事に、改めて向き合う試みが相次いでいる。

時代読み解く岡井隆

戦争に大震災を重ねて

茂吉研究で知られる歌人の岡井隆(84)が『今から読む斎藤茂吉』(砂子屋書房)を出した。馬陸のさまを見て私の熱き涙1930年代を中心に、茂吉が「せきあへず」と興奮し、多くの作った短歌や随筆を読み直した。戦意高揚の歌を作り続けた茂吉



蔵王を背に滝山山頂に立つ斎藤茂吉。「うつせみの胸戸ひらくるわがまへに蔵王は白く雁戸ははだら」とよんだ=1941年、高橋重男氏撮影(斎藤茂吉記念館提供)

生誕130年

1882年、山形県金瓶村(現・上山市金瓶)生まれ。正岡子規の流れをくむ伊藤左千夫入門、「アララギ」創刊に参加。第1歌集『赤光』で注目された。医業のかたわら、養子となった大病院の焼失などに耐えて名歌を生んだ。1953年死去。県立神奈川近代文学館で10日まで、生誕130年記念展が開催中。



岡井隆=麻生健撮影

は、敗戦で文学者としての戦争責任を問われる。

だが、岡井は、茂吉のこんな文章などに目をとめる。「戦争がはじまると、歌人は勇奮感激して歌を作り、また放送局でも雑誌でも新聞でも競うて戦争の歌を徴求し、ここに於て歌も武装せざるを得なかつた」

岡井は3・11後の「がんばろう日本」や反原発の合唱に、戦中と似た圧力を感じ、「原発はむしろ被害者、ではないか小さな声で弁護してみた」という歌を作った。「でも、戦争となつたらどうだろうか」と考える。

そして、占領下に短歌そのものを批判する「短歌滅亡論」の嵐に見舞われ、「短歌ほろべ短歌ほろべ」といふ声す明治末期のごとくひびきて」とうたった晩年の茂吉の悲しみが、「自身が老いてやつと身にしみて感じられる」という。

「戦争も、大震災も、歴史的事件に際して取った行動が正し

かったかどうか、結果が出るのは何十年も先だ。その時は感いに感つてある方向に行く」。それを体験していない世代に伝えるのは難しい。

「今の短歌に、ある政治状況

手法語り合う歌人ら

ゴッホや映画と共通点

先月末、横浜市の県立神奈川近代文学館で「茂吉を語る会」があった。

万葉学者の品田悦一東京大教授は、茂吉がゴッホ晩年の作品について書いた随筆から、茂吉の「写生」に迫った。ねじれた糸杉など、ゴッホの奇妙な変形や強烈なタッチに、茂吉は狂気ではなく高い芸術性を見た。

「ゴッホと似たことを、自分もことばでしている」と直感していたからだ。

例えば、茂吉の初期の代表作「のど赤き玄鳥ふたつ屋梁にゐる足乳根の母は死にたまふなり」は、つばめを見上げると同時に死にゆく母を見つめるという、ゆがみがある。それが異様なまでの厳肅感を生んでいると、品田はみる。

茂吉短歌は21世紀の今も新しい。(伊佐恭子)